

10月23日(日)

馬渡水産長崎県香岐から奥原歩久斗が待ちに待った

鱒^{あじ}のみりんずし



1枚

250円 (税込)

西田鮮魚店

072-5246

御用聞き便専用番号 ☎090-7125-5489 (旧庄原市内はご自宅に配達)

御用聞き便ポイントカード 火・水曜日ポイント2倍

新米に合う
絶対旨いシリーズ
第4弾

大変お待たせしました！

「今度はいつ入る？」と、しつこく聞いては店長を困らせていた奥原。

ついに皆様待望の鱒のみりんずしが、3年ぶりに再入荷して参りました！

話すと長くなりますが、かれこれ4〜5年前長崎県の香岐市へ

初めての視察というものに行つたのが始まりでした。

当初の目的とは全然関係ない所で出会った鱒のみりんずですが、

泊まっていた旅館の朝御飯に出てきたのがきっかけ。その時の店長の

眠たそうな顔や二人して「旨い、旨い」と朝から騒いでいたのを感じ

出します。

その後仕事で島を回っていたのですが、いつの間にか鱒のみりんずを探

す旅へと変わってしまい、気がつく。〇〇旅館で出している鱒のみ

りんずは、何処に行くかと買えるんですか？」と聞き込み調査が始まったの

です。

皆さんご存知の方もいらっしゃいますが、私と店長は小学生の時か

らの同級生。一緒にいる上司の小林部長をほつたらかし状態で

夢中になり、真面目に探偵ごっこしながら探しました。

努力の甲斐有り、発見し直ぐに仕入れたいと交渉に入るや否や、

「いいよ！早つ！なんと、フランクで話の弾む人なんだ！むしろ仕事

の話しせず世間話が大半で交渉終了。人の良さもあり、わたしたち

にとつても益々思い入れの強い商品へと、なつていきました。

「ご飯に合うこと間違いなし！毎日でも食べたい一品！」

私も、今回の鱒のみりんずを家の親父に沢山買って帰る、たたく頂い

てもらい、私は有り難うの言葉をたらふく頂こうと思つています。

皆さんも是非奥原、祐宗の二人でお勧めする長崎香岐の鱒のみ

りんず堪能下さい！

西田鮮魚店 主任 奥原 歩久斗

『かわいいお花畑』

広島県の最北、鳥取県と島根県の県境に庄原市という人口32862人の町がある。

全国1741市町村のうち、13番目の広さを誇る市。因みに人口は全国702番目。ついになら人口密度は、上からいうと1471番目、下からでは271番目。一人当たりの面積が広いということは、それだけ、ゆたらかに住めるということ。いかに、住みやすい土地かがわかる。

この町に、『ジョイフルながえ』という半世紀に近い歴史をもつショッピングセンターがある。

昭和54年に生れたこのショッピングセンターを育ててきたのは、いうまでもなくこの町に生れ、この町に育った人々。そして、縁あり嫁ぎ、この町の住民になった人々だろう。

彼らにとっての『ジョイフルながえ』は、ショッピングセンターという名のとおりに、買い物場であるが、しかしそれだけではないに違いない。

地元の商店街を二分するかのような形で生れたという、このショッピングセンター。住民の思いは、都会のそれとはまったく異なる。何が異なる？ひと言でいうなら『愛着』だろう。

今の時代に失われつつある人と人との結びつきが、ここにはある。お客の親の名を知り、子の顔を知るといふ結びつきが。

庄原という田舎町にある、『ジョイフルながえ』という小さなショッピングセンター。庄原もジョイフルも、たぶん、居心地が良いのだ。理窟ではない。この古びた遠慮の無さが、心地良いのだ。

昭和50年代に出現し、繁栄し、令和になり、その役目を終えようとしている各地のショッピングセンター。

『ジョイフル』も例外ではない。

『ジョイフル』の建物もさすがに傷んでいる。傷んではいるが、景色にとけこんでいる。これはこれでありかもしれない。ここで商いをし、買い物をしてきた人の思い出がつまっている。

だからだろう。今なお、『ジョイフル』への人々の愛着は深い。

そんなことを思いながら歩いて目にとまった。

駐車場の入り口。『いらっしませ』と、手作りの看板と、その下の小さな花畑。

『ジョイフル』にはピツタリではないか。看板に思いがあるし、そこに配された花もかわいい。

たまたま、居合わせたジョイフルというロゴの入った半そでのTシャツを着た女性に訊いてみた。名札に小森とあった。

「寒いにお元氣ですね。半そでで歩かれるなんて。」

「いえ、若いですから。」

失礼しました。

「ステキですね。この花畑。」

「でしょ、さつき完成したばかりなんです。」

「中に、西田鮮魚店というお魚屋さんがあるんですよ。その西田専務と本部の倉本という部長が二人でやってくれたんです。」

「なるほどね、ご自分たちで。どおりで味があると思いましたが。手弁ですか、お二人とも。」

「ええ、西田専務は、こんなことがお好きらしくて、何日もかけて、少しづつ、お家で作られてみたいですよ。ここに据え付ける時は、まだ夏だったので、二人で朝早くから真っ黒になって汗だくで、頑張られました。」

材料は『生活や』という雑貨屋さんがジョイフルにあるんですけど、その会社がタイニーハウスなんかの販売をやら

ている建築デザイン会社なので、無料で提供してくださったんです。永井社長に無理をお願いしました。お金が無いんで、こんなことしかできないんですよ。」

「いやいや、こんな手作りがいいんですよ。心がこもっています。」

「ええ、倉本が、見かけとは違って、花が大好きな、心のやさしい人間なものですから。この横の街路樹の下の花も倉本が音頭をとって、ジョイフルのみんなで世話してるんですよ。」

「すばらしいことですね。花畑の花の植え方もセンスいいですけど、これも倉本さんたちが……?」

「まさか。『TOROBACO』さんという会社にやっていただいたんです。」

なるほど、ひとつひとつの仕切りがトコ箱だ。

「西田鮮魚店さんでいただいたてきたトコ箱の底を打ちぬいて作ったんです。最初は、自分たちでやろうと思っていたんですが、『TOROBACO』の小山社長が見に来られて、これじゃあ、ちよつと雨が降ると、土が流れてしまうよと言われて、見かねて、やってやろうということ。」

田舎町の強さだろう。人と人のあいだが近いから、商売っ気抜きで助けてもらえる。でも、笑いながら小山社長が言われたそうだ。10人ほど、お客様を紹介してもらえば、元は取れるからと。

彼女も、週一で、『TOROBACO』のお店に通うお客なのだそう。ホームセンターに並ぶものに比べて、値段は高いのだが、大きく、広く、そして長いこと咲くのだとか。

「何が違うんでしょうね?」と訊くと、「わからないけど、そうなんです。」と答え、「いちばん、うれしいのは、なんでもていねいに教えてもらえることなんですよ。」と話してくれた。種や苗を買うのはいいが、袋の裏の小さな小さな文字で書かれた説明を読むのも難儀だ。それに、こう言っては何だが、通りいっぺんで、あまり役にたたない。

「ジョイフルの玄関にはスペイン風の趣のある『ジョイフルガーデン』があるんです。だから、こちらは『かわいい花畑』と名前を付けようと思ってるんです。これから、どんな花が大きくなっていきます。また見に来てくださいね。」

そう言っ小森さんは店に入って行った。

田舎の町の古びたショッピングセンター。良い感じだ。

少し、離れたところから見てもたくて、ちよつと書き方を覚えてみたのですが、中身はそんなに変わりませんでした。

仕方ないですね(笑)。

ただ、変わり映えのしないように見える『ジョイフル』ですが、お店の人たちも、スタッフの人たちも、なんだかんだと、がんばっているんですよと、お伝えしたかったのです。一人称で書くと、ちよつとね。



かわいいお花畑に立つ小森館長と徳永さん